

「今、学校で始まるがん教育」林和彦・東京女子医大教授が講演 新発田北蒲原学校保健研修会

新潟県の新発田北蒲原学校保健研修会が2月22日、新潟県新発田市の豊浦地区公民館で開かれ、「今、学校で始まるがん教育」をテーマに林和彦・東京女子医科大学教授が講演した。研修会の開催には、日本対がん協会も協力し、養護教諭や学校医、学校歯科医、学校薬剤師ら57人が参加した。

林教授は、がんの専門医としてがん患者や家族とかかわってきたなかで、数年前から、がん教育の必要性を感じ、各地でがん教育の出張授業を続け、昨年春には教員免許も取得した。

講演で林教授は、病院や新宿駅構内などでがんの啓発のイベントを行うなどしたが、そこにはたばこを吸い続けている人など、本当に啓発したい人がこないことに気づいたことを紹介。そのころに、抗がん剤の治療で髪の毛が抜けてしまった女性患者の孫が「おばあちゃん、気持ち悪い」という場面に居合わせた。「この子がそんなひどいことをいうのは、がんのことを知らない

から。子どもだからこそ正しいことを知るべき。それなら学校に行って伝えようと思った」と、がん教育を思いついたきっかけを明かした。

さらに、がんについて正しい知識を持ってもらうことと、がんは身近で命にかかわるため、健康と命の大切さを主体的に考えてもらうことの

2点ががん教育の目的であると指摘。実際の授業では事前に子どもたちに①がんについて知っていること②がん患者にはどんな苦しみがあるのか③もし大切な人ががんになったら何ができるのか——をアンケートし、授業の前半は、がんの知識や検診、予防の大切さを伝え、後半では、子どもたちの事前アンケートの答えを示しながら、命の大切さを考える授業を進めていることを解説した。

これまで各地の学校で行ってきた実際の授業の様子もビデオで紹介し、そ



子どもたちががんについての事前に考えて書いたアンケートを示しながら語る林教授

の中で、授業を受けた中学生が親に授業のことを話したことで、今まで一度もがん検診に行ったことがなかった父親が検診に行くようになった例も示すなど、がん教育の効果を説明した。

林教授は「子どもたちに事前にがんについて考えてもらうことが大切。知識は教えるが、子どもが潜在的に持っているものをちゃんと引き出してみんなで共有できるようにしたいと思ってやっている」と語り、地域の実情に応じたがん教育の進め方をアドバイスしていた。